

Osaka U. Days in SJTU

上海交通大学における阪大留学フェア

08年12月16-17日、於上海交通大学ミンハン・キャンパス

全体・高部行動報告書（第3版）

高部英明

【本記事は08年12月16-17日に上海交通大学に阪大関係者37名で説明会と交流会を行うべく出かけた際の報告書である。第1版は1/20の中国WG委員会に間に合わせるため、未完の部分もあり、写真がない(09/01/17)。第2版では文章の訂正と写真をつけた(1/29)。第3版では写真を付録に増やし、参加案内や参加者リストを付録につけた(1/31)】

目次

1. 事の起こり、準備.....	3
2. 16日朝（上海交通大学の説明）.....	5
2.1 SJTU 概要	
2.2 国費留学生制度（CSC Program）	
2.3 SJTU におけるその他の大学間協力の現状	
3. 16日午後（大阪大学説明会）.....	9
4. 初日夜（歓迎会）.....	13
5. 17日午前（名古屋大学中国事務所訪問）.....	16
6. 17日午後（物理グループの交流会に参加）.....	17
7. 17日夜（印副学長との晩餐会）.....	18
8. 最後に.....	20
9. 参考文献、HP集.....	21

付録

付録1：上海交通大学にて阪大留学生フェア実施（調査：回答期待）...	22
付録2：参加勧誘の最終案内.....	24
付録3 2日間のプログラム.....	28
付録4：参加者リスト.....	29
付録5. 上海交通大学、京都大学、清華大学.....	31
付録6. 学長としての Jie Zhang.....	33
付録7. 中国大学事情.....	35
付録8. 中国大学の企業研究所としての役割（未完）.....	36
付録9. 国際交流打ち合わせ（12月15日夜）.....	37
付録10. 上海交通大学附属中学校副校長と（12月15日午後）.....	40
付録11：集合写真と上海写真集.....	42
付録12：高部の大阪大学紹介 PPT ファイルより.....	46

概要

大阪大学と上海交通大学(SJTU: Shanghai Jiao Tong University)は姉妹校的關係にある。08年12月16-17日の2日間、大阪大学から37名の教員達が参加して第1回の「Osaka U. Days in SJTU」(阪大留学フェア)を開催した。物理、数学の大部隊を含む8分野のグループで、16日は主に全体行事。17日は各グループに分かれてのSJTUの同じ分野の研究者・学生との交流プログラムを実施した。SJTUに知り合いがない先生には、SJTU側責任者の印副学長(教育担当)を通して同じ専門分野の教授を事前に紹介していただいた。ここでは、全体の世話をさせていただいた者として、全体行事の様子や17日の私が見た様子を、時系列に旅行記風に紹介する。各グループの活動報告書は別途、各グループリーダーから提出されている。そこには活動紹介だけでなく、成果や反省点なども記載されているので、今後に生かす材料にしたい。

阪大の教員とSJTUの学生、教員が顔と顔をつきあわせ、人間的なつながりを通して交流を深めることが両校の今後の關係に極めて重要である。主に、阪大への留学案内や阪大教員による模擬講義、研究紹介など英語で行うことで、SJTUの学生が多数、阪大に留学希望してくることを期待している。同時にまだSJTUを知らない阪大の先生達にSJTUの阪大以上に優れたキャンパスや研究施設も見ていただいて、逆に、阪大生をSJTUに送り出す可能性も考えてほしかった。

今回の試みの成功を受けて、17日の夜、SJTU側の責任者・印副学長との今後の交流に関する話し合った。そこ結果、以下のような項目の可能性を検討することで高部が阪大に持ち帰り議論することになった。

- (1) 09年の両校学術セミナー(第14回)はSJTUで開催の年なので、第2回の留学生フェアと合同で開催してはどうか。
- (2) 「留学フェア」を毎年開催する場合、11月初めがCSC Program(国家留学奨学金プログラム、第2節に詳しく説明している)や進路決定と関連して時期的には最適。
- (3) 米国がやっているように、阪大だけでなく10くらいの日本の大学を阪大がとりまとめて連合で「留学フェア」をしてはどうか。その場合、場所はSJTUが提供するし、SJTUだけでなく復旦大学、浙江大学、南京大学、東南大学など近隣の有名大学の学生も参加できるようにSJTU側で手配する。そうすれば、

両者にとって有益かつ合理的ではないか。

- (4) 阪大も SJTU にミシガン大学のように **Joint Institute** を設立してはどうか。そして、この **Joint Institute** をただ阪大だけが使うのではなく、他の日本の大学の先生の講義などの機会を与えることは両校に大いにメリットがある。そして、**SJTU+OU** の **Double Degrees** が取れるようにしていくと、学生にとってのインセンティブが大きくなる。

留学フェア期間中、終了後、皆さんから多くの感謝の言葉を頂いた。重要な点を1つ上げておきたい。同じ阪大に勤務していても分野が異なるとほとんど交流がない。しかし、今回のように8分野の人たちが2日間、食事を共にしたりしたことで、学内に横のつながりが出来た。「国際化」のための留学フェアで阪大職員、院生の「学際化」も小さいながら同時に実施できた。中には、この機会に知り合った人同士でこれから共同研究しよう、というケースもあった。これも重要な成果と考えている。

この行事は掛下委員長が統括した08年10月8-9日の「阪大・SJTU 第13回学術セミナー(於：阪大)」の際の会話がきっかけで企画された。10月末からの短期の準備にもかかわらず、辻副学長達の支援もあり、楽しい大阪大学国際交流行事を実施することが出来た。また、本部国際部初め関係者の皆さんのご支援・ご協力に感謝したい。最後に、私が理解している中国事情に関する付録もつけた。参考にしてほしい。

1. 事の起こり、準備

大阪大学が中国で最初に協力協定を結んだ大学が上海交通大学(Shanghai Jiao Tong University: SJTU)[1,2]で、1994年のこと。その後、毎年、交互に学術セミナーの交流を行ってきた。08年10月8-9の両日、阪大がホストで新たに物理分野を含む6セッションの学術交流を行った。その際に阪大を公式訪問した SJTU の張学長が、鷺田総長との面談で「過去13回のセミナーを主とした交流による成熟した両大学の間を受け、新たな関係を築く段階に進むべきである」と発言し、鷺田総長も「両大学に有益なことは全て歓迎である」と返答した。

学術セミナーの期間に SJTU の国際交流部・許主任から辻副学長(国際交流担当)へ、SJTU で阪大説明会を行うなら受け入れる用意がある、との意思表示があった。張学長の意向でもある。歓迎会の席で辻先生からその話で相談を受けた高部が

実施の可能性を検討することになった。さらに辻先生と話し合いをし、まず、どの程度の阪大研究者が説明会・交流会に興味を持っているか高部が出来る範囲で実態調査をすることになった。私の動機は、中国で昨年からはまった国家留学奨学金制度（CSC Program：詳細は後にある）でSJTUの優秀な大学院生を受け入れるための「留学フェア」の実施であり、かつ、6年来の共同研究者であり、親友でもある張(Zhang Jie)学長（06年11月に学長に就任。付録6参照）のSJTUと阪大の世界的競争力の向上である。



10月末から動き始めた。まず、私のメールアドレスにある人で、最後がosaka-u.ac.jpで終わる人のリストを作成し、BCCで全員に趣旨説明をし、「手弁当でも参加したいと思う方は返事をください。SJTUに知り合いがいない場合は、同じ専門分野の教授を紹介します。日時は暫定処置として12月16-17日の2日間」と書いた（付録1）。あと2ヶ月もない時点でのアンケートである。こういう時は恥も外聞も切り捨てる。すると、既に用意をしていた物理学専攻以外からも返事が来た。熱烈な返事から、興味有りという程度の返事まで。中には「参加したいが予定が既に詰まっている。何でこんなに急に提案してくるの」と、恨み節も多数あった。当然、大多数は返事無し。しかし驚くことに20名程度の教員から参加したいと返事があった。この数を根拠に、実施の判断を辻先生にさせていただいた。最終的に大阪大学の国際交流公式行事にしてくださった。

この時点で実施可能と判断し、張傑(Zhang Jie)学長（以下：Jieとかく）の携帯に国際電話を入れ、実施したい旨伝え、SJTUの対応責任者を指名していただいた。印傑(Yin Jie)教育担当副学長がSJTU側の責任者に指名された。そこで彼とのやりとりが始まった。阪大側の参加希望者でSJTUに知人のいない先生に、同じ専門分野の先生を紹介していただいた。その後は、阪大側の先生にメールと電話番号を教え、2日間の交流をどうするかは、両者に任せた。国際交流の公式行事となったことで、国際部より公式行事（阪大説明会）の要請があり、その時間枠を初日の午後2時間、確保した。すると、印副学長から、初日の朝はSJTU側の各分野の

責任者と顔合わせを兼ねて、SJTUの説明会をしたいと連絡が来た。これで、16日の4時までの時間は埋まった。

開催日が近づいてからは、SJTUの国際交流部の許主任と高部のメールや電話のやりとりとなった。そして、16日の歓迎会、17日の晚餐会なども決まっていた。とにかく私の役割は、参加の勧誘、全体行事の日程、プログラム、受入教授の紹介、私が取ったホテルの情報、上海の地図や観光地、キャンパスの場所など情報提供が主。後は全て、グループ責任者か参加者個人に任せた(付録2, 3, 4)。「子供じゃないんだから、自分で勝手に集合場所に来てよ」のセンスである。その代わり、情報は多すぎると思われるくらいメールで提供する。結果として大きなトラブルもなく、スムーズに2日間の行事を遂行することが出来た。



07年12月に物理専攻3名とSJTUを訪問したとき。右からZheng、小川、Zhang学長、高部、岸本、久野、Xue(清華大物理)

2. 16日朝(上海交通大学の説明)

皆には9時に私が宿泊しているホテルのロビーに集合と連絡していた。旧本部ゲストハウスから国際部4名(付録8)を乗せてバスが来る。ロビーに一軍の集団があり、初顔合わせを含めて自己紹介をする。私は何人ここに集まるか知らないで、9時10分まで待つて出発する。上海体育館からミンハン・キャンパスまで1時間はかかる。

バスはホテルのある上海中心地から30kmほど南西にあるミンハン・キャンパスの東門、狛犬が赤い門を守る前に来た。中国(風水学?)では東は「吉」が吹き込む方向で、これが正門。旧本部の正門を大きくした中国屋根の門である(写真)。この先、約3kmがSJTUのキャンパス。中央に、南北に高速度道路が突き抜けている。門を入



上海交通大学ミンハンキャンパス東門。写真は08年8月SSH研修の際。詳しくは付録7のHP

ると、参加者から「ウォー」と感嘆の声が上がる。キャンパスは広く、緑も多いので、茶色を基調にしたビル群が見る者を圧倒する(付録 11)。

意外と早く着いたので開始の 10 時半まで、船舶工学の屋内水槽研究施設を見学する。プールは 50m×40m で深さが 10m。中央には深水実験や採掘研究のための 40m の円形部分がある。今日は水を満たしていたので見えなかった。このような立派な施設を SJTU は持っているので阪大の研究者・学生で、ここで実験に携わりたいと希望するなら、院生を 1 年程度滞在させるプログラムも検討してはどうか。



巨大な屋内水槽。プールは 50m×40m で深さが 10m。中心には深さ 40m の円形部分がある。08 年 4 月撮影

その後、キャンパスの中央部北側にある「行政楼」に着く。広い玄関を抜け、キャンパスのレプリカ(次頁写真)で位置を確認する。2 階の会議室に案内された。大きな長机に 20 名ほどが座り、その後部両側に残りの方が座る。印副学長の歓迎の言葉から始まった。若いが大声で早口の英語で歓迎の言葉を述べる。早々に SJTU 紹介 DVD が流れる。昨年の DVD からずいぶん新しくなっている内容もあった。

印副学長の説明の要点を箇条書きしよう

2.1 SJTU 概要

SJTU は中国で 2 番目に歴史のある大学。日清戦争後の設立経緯などは付録 5 を参照(付録 7, 8 も関連)。第 2 次世界大戦後、新政府の方針で交通大学は西安交通大学など他の都市にも設立された。1952 年、SJTU の理学部は復旦大学に移った。だから、SJTU の理学部は中国内で 10 位程度と低い水準(自然科学総合は中国では 3 位)[4, 5]。3 年前に上海第 2 医科大学を吸収し医学部が設立された。

- ・教員 2000 名 [内 700 名の教授(full professor)]。
- ・学生総数 31,000 名(学部生 18,000 名、大学院生 9,000)
- ・分野：工学 50%、生命・生物・医学：30%、理学：5%

理学の割合が極端に低いのは理学部は数学と物理だけだからである。交通大学では理学部は日本の旧教養部に相当すると考えると理解しやすい。物理、数学は工学や生物、医学の基礎であり、研究より教育の役割が大きい。教育も SJTU の学生の数学・物理教育だけでなく、上海近辺の小さい大学の数学・物理教育も実施する仕組みになっているため、教員の数は多くいそうでも、研究力では中国では 10 位程度になるようだ。



ミンハン・キャンパス[3]。本部（行政楼）の1階にあるキャンパスのレプリカ。

2.2 国費留学生制度(CSC Program)

07年2月に中国政府が打ち出した「中国政府奨学金による毎年5千人の大学院生の海外留学支援制度」。これは Chinese Scholarship Council の Program で有ることから略称「CSC Program」と呼ばれている。その詳細は例えば JST の HP[6]を見ていただくとして、上海交通大学は毎年300名の博士、修士課程学生を送り出す権利を有する。この内、半分が3年間で PhD を取得するプログラム。後の半分は、「サンドイッチ方式」と言い、例えば SJTU の大学院の2年目を海外の大学で勉学・研究し、帰国して SJTU で学位を取る方式。

2008年度の SJTU の実績は3年留学の院生を152名送り出し、内、米国が62名、日本はわずかに5名であった。CSC Program については米国、英国、ドイツから「SJTU から何名を受け入れたい」と人数の提案を受けている。（ただし、英国は現時点では授業料免除をしてくれない方針）。



CSC Program による留学勧誘の

2階会議室での SJTU 説明会の様子。一番奥が印副学長。副学長が達者な英語で早口で説明していく

行事も受け入れている。08年は10月に米国の10近い大学が団体に大学説明会を開催した。日本も個別の大学でなく10程度の大学が同時に説明会をSJTUで開催してくれると、復旦大学、南京大学、浙江大学など近隣の大学にも案内を出し留学説明会を開催できる。この方式にしてみてもどうか。(印副学長、許さん)。時期的には10月末から11月初めがよい。CSCの申請締め切りが年末。

CSC Program以外にもSJTU独自の留学生派遣programがあり(130名)。詳細は問い合わせの必要有り(高部)。

CSC Programの概要は、

1. 海外の大学に博士課程3年間の滞在を奨学金付きで支援する(日本の場合月額13万円程度、授業料免除が原則、例外有り)
2. 中国の国家重点大学約40校がそれぞれに派遣の人数を指定されている。SJTUの場合は上の通り。
3. 希望する学生は受け入れ教官の受け入れ証明書をつけて12月31日まで国家留学基金に書類を提出する必要有り。
4. この段階で大学はSJTUの場合300人枠に対し、1.5倍の450人を推薦する。後は中央で書類審査し300名に絞る。
5. 阪大留学フェアなど行うなら11月初めまでに実施し、学生とやりとりして申請する事が望ましい。
6. 採否の結果は3月に通知される。
7. 留学生は8-9月に、出発し、新学期から入学する。

2.3 SJTUにおけるその他の大学間協力の現状

1. 世界150大学と協力協定を結んでいる。
2. 中には「中国10最高学府」と「Univ. Calif. 10校」との協定のような包括的な協定もある。
3. Joint Institute with U Michigan
2年前にミシガン大学とのJoint Instituteを設立した。2000年から交流を始めており、学部生・大学院生の累計900名が参加した。その内、100名が両大学の学位を取得した。Joint Instituteでは常時、海外の著名な教授を招待し、英語で講義を行っている。SJTUではUMの学生とSJTUの学生が一緒に同じ教室で講義を受ける。Joint Institute Programには現在600人が参加。SJTUからは現在学部生72名が2年間、UMで勉強しており、両校の卒業証書(学位)を受け取ることになる。
4. Summer School with George Tech. Univ.

上記プログラムを最近始めた。1 セメスター（9 週間）で GT から多数の先生が来て集中的に授業を行う。期間は 5 月から 8 月の内の 9 週間。分野は工学分野であるが、工学の学位と MBA の学位の両方を取得できる。08 年は 50 名の学生が参加。講義には中国の文化・伝統などに関する英語での講義もある。たぶん GT の学生希望者も参加できるのでは。

5. 早稲田大学との交流

早稲田大学とは学生の長期留学生交換制度、Double Degrees 制度など実施している。例えば、SJTU で最初の 2 年間学び、大学 3, 4 年と早稲田で学ぶことで SJTU と早稲田の両方の卒業証書をもたらえる。教育と研究もリンクしたプログラムがあり、12/16 日は同じ建物で、早稲田大学から教官含む 30 名が来ていて、生命分野の研究報告会を SJTU の先生学生と共同で行っていた。

6. その他

- ・ SJTU の学部生の 17% が oversea program に参加している。
- ・ 千葉大学から 2 年間の留学受け入れの案内が来るが、希望者がいない。（高部の友人の松元教授から以前聞いていた。次回は千葉大も含めても良いのでは）

3. 16 日午後（大阪大学説明会）

印副学長の闊達な英語での説明は続き、最後に質問時間を設けた。その後、昼食を学内で取り、午後の全体プログラムを実施した。

午後は、「陳瑞球楼」の建物の 2 階の講義室を利用した。1 階の別の部屋では早稲田大学が研究報告会を開催していた。SJTU ではこのような行事のアナウンスは HP に掲載され、興味ある学生が参加する。時間が来ても印副学長が現れないので、私が前座を務めて、学生達に簡単な挨拶をさせていただいた。

印副学長が少し遅れて到着し、添付のプログラムに従って説明会をスタートした。印副学長の簡単な挨拶、引き続き、末永先生が阪大側の辻副学長挨拶を代読し、秘書が中国語に通訳していく。これで約 10 分。この後、高部が阪大を代表して「Brief Review of Osaka University」と題して、PPT-file を用いて大学紹介をした。

2 週間ほど前、高部が大学の概要説明をすることになり、国際交流が留学生など

に説明するための大学紹介の PPT-file をいただいた。しかし、その中身を見て「これでは学生が寝てしまう。文章や数字や統計など、阪大のデータベースとしては価値があっても、とうてい、大学の魅力的な紹介にはなっていない」と判断



大坂大学説明会の様子。これは、印副学長が時間になっても現れないので、高部が前座をつとめている。

した。そこで、15 分の説明のアウトラインを決め、週末を利用して Google でいろいろな写真などを見つけながら「日本の大阪大学はイメージ的に魅力的で、興味を持った」と、中国人の修士の学生レベルが感じるような PPT-file を作成し直した。

中国の若者が一番影響を受けている日本の文化はマンガである。マンガという言葉ではなく、米国で日本のストーリー性のあるマンガに使われている言葉、「Graphic Novel」という造語の方が実態を良く表現している。「絵を主体にした小説」である。2 人の子供の影響で、私も数種類のマンガの長編を読んできた。「マンガ」と馬鹿にしてはいけない。中には極めて完成度の高いストーリーのマンガがある。そして、日本のマンガは世界中でありとあらゆる種類が翻訳され販売されている。

そこで、まず出だしは阪大が誇る世界の超有名人、手塚治虫先輩に登場していただくことに決めた。大学院生が「鉄腕アトム」を知っているか気になったので、北京の天文台の友人に、周りの院生がよく知っているかメールで聞いた。すると、Death-Note など、沢山の日本製マンガの写真を添付して「こんなのの方が有名よ」と返事が来た。博士後期 1 年の息子が、M2 の時、指導教授の中国との共同研究の一環で清華大学で 3 ヶ月間滞在した。その時、研究室の 13 名の大学院生達と共に和やかに過ごした経験があるので、息子に「アトムのことは皆、知っているか、聞いてくれ」と頼んだ。答えは「もちろん、有名」とのこと。また、滞在中には「名探偵コナン」や「ドラゴンボール」などの話で盛り上がったと聞いたので、まずは、「コナン君」と「悟空」に登場していただくことにした（付録 12 の写真）。

「君たちは、コナンやドラゴンボールは当然知っているよね。日本のこのような Graphic Novel の創始者は鉄腕アトムの作者、手塚治虫だ。彼は大阪大学医学

部の先輩で、阪大卒業生で最も有名な方だと思う。君たち、この少年の名前知っているよね。名前は何かな？」と、会場の学生に質問する。すると小さいが声が上がる、が、聞こえにくいので「もっと大きい声で」と言うと、皆「アトム」と答えが返ってきた。この時、後ろで聞いていた印副学長（年齢は40代の半ばと思う）が立ち上がり、「アトムは中国では俺たちの世代のヒーローだ」と大きな声で応えてくれた。

大阪の歴史にも触れた。中国の急速な進歩は日本の戦後の焼け野原からの復興に似ているので、特に、先の世界大戦による米軍の B29 重爆撃機により完全な焦土となった大阪駅周辺の航空写真を示して、そこからの復興の歴史を説明した。そのために次に、同じアングルで撮った現在の大阪駅周辺の航空写真を示した。人間の営みの力強さを説明したかった。彼らに、中国の未来像を暗示したかったのである（付録 12 の写真 2 枚比較）。

大阪市と上海市は姉妹都市である。この際だからと、姉妹都市提携の式典の写真（付録 12）を見せようと Google で探したが、無かった。その過程で、大阪市博物館に有りそうだとわかり、メールした。すると、日中国交回復（1972年9月）間もない1974年4月18日、上海市政府大講堂で、大阪から船で式典のために来た400名と上海市の1800名が参加して、姉妹と締結の式典を行った記事が送られてきた。白黒の写真もあったので、使わせていただいた。当日は大阪市上海事務所所長の今中国雄氏が特別参加してくださった。

戦後の急速な経済復興の過程で生じた70年代の「公害」問題を説明した。そのために、スモッグで霞んでしまっている当時の大阪湾臨海地帯の航空写真を Google からさがしてきた。それを、約10年程度かけて大阪市の「Blue Sky Project」が公害撲滅に取り組んだ話など紹介した。そして、次のページで、同じ辺りの今日のきれいな夜景を見せた。中国の若者に「やれば中国も公害を撲滅できる」と知ってほしかったのです。

最後の方では、NASA の気象衛星が撮影した中国本土と日本を含む気象写真を見せた（付録 12）。写真を見ると恐ろしくなる。中国の海岸線が見えないほどの巨大な黄色いスモッグが偏西風で九州、山陰にまで達していることがわかる。ここで「We are in the same ship」と言い、中国の環境問題は日本の問題でもある。日中が協力して中国の公害問題を解決しなければいけない。そのためにも日中の連携は不可欠である、と言わせていただいた。

同時に、中国とは 1500 年の長い交流の歴史があることも学生達に説明した。中国の高僧、鑑真和尚が 3 度苦難の航海の末、視力を失いながらも日本に来てくださり仏教という文化の普及に生涯を捧げてくださったこと。その寺が「唐招提寺」で、胡錦涛主席が 08 年 5 月に来日した際、唐招提寺にお参りした写真を見せながら説明した。胡錦涛主席は当時の福田総理との日中首脳会議（08 年 5 月）のための来日であった。その際、新しく「日中の戦略的互惠関係」[7]が結ばれ、日中関係が 08 年に新時代を迎えたことも説明した。胡錦涛氏は帰路、奈良に寄り唐招提寺を雨の中訪ねた。

後は、大阪大学の概要説明。大阪大学の原点である「適塾」については緒方洪庵より適塾が生んだ偉人の 1 人、福沢諭吉の方がわかりやすいので、一万円札の写真を示して、当時の話をした。私は福沢諭吉の「福翁自伝」[8]が大好きで、学生などに「是非読みなさい」と薦めている。同時に、私は、過去 4 回は読み返し、そのたびに新たに感動してきている。そこで、Google で調べたら、中国語への訳本も出版されていたので、その本を是非買って読んでみてくださいと話した。この本を読むと「学問をすることは何か」という原点が書かれており、同時に当時の適塾の自由奔放さと厳しさがわかりやすく書かれている。皆さんも是非一度、読んでみてください。最近、角川文庫で新装版が出版されている。読むならこれをお薦めします。

このような 15 分の私の概要説明に引き続き、留学生センターの西口先生が留学に関する説明を行った。後半を工学研究科の黒田先生が説明しようとしたので、その前に、私の説明を含めて質問時間を設けた。沢山質問が出た。私の知る範囲で答え、かつ、西口先生も詳しく答えてくださった。どんな質問が出たのか、一ヶ月過ぎた今日時点で忘れてしまった。とにかく学生は熱心だった。

黒田先生の説明の途中で、許さんが「先生、物理も他のところも、グループ別のプログラムの準備が整って、皆さん待っています。すぐ、それぞれの場所に行くように先生達に伝えてください」と言われ、阪大の方々はこの説明会場を後にした。私は会場に残った。西口、黒田両先生の説明資料は、本部国際部の脇、香川両氏が資料作成に携わり、大変丁寧な大阪大学の国際交流関係の情報を満載した英文の PPT-file となっていた。

黒田先生の後、阪大に留学し今は上海で活躍している上海大阪大学同窓会の先輩の留学時の思い出など 2 方に話していただいた。中国語で話しているので私にはさっぱりわからないが、後で聞いたら、えらい阪大のことを持ち上げてくれた

そうである。これについても学生から沢山質問があり、時間を大幅に超過して全体説明会を終了した。終了後も、西口、黒田、脇、香川の4名は個別に学生の相談に対応した。終了後すぐ、私のところに女子学生が来た。「私は大阪大学工学研究科の電気系に留学したいと願っているのですが、今回は電気系の先生がいませんね。なぜ、私が相談できる先生を連れてきてくれなかったのですか」と責められるように質問された。「ごめん、ごめん。電気の先生達にも何人か参加をメールで促したんだけど、今回は来られなかった。ごめんね」と言うしかない。

4. 初日夜（歓迎会）

夜は、張副学長（初対面）がホストで晚餐会を開催してくれた。参加者は 5:30 に説明会の会場前に集合し、バスで、1 時間程度の市内旧本部近くのレストランに向かった。阪大側 37 名。SJTU からは今回の 6 つの専門分野から平均 2 人ずつ先生が参加した。会場に着いたが、張副学長は車の渋滞で遅れるので始めてほしいとのこと。早々に歓迎会が始まった。4 つのテーブルに分かれ、それぞれで乾杯の音頭があがる。紹興酒（これがなかなかおいしい）とビールが飲み物で、料理がどんどん運ばれてくる。かなり盛り上がった頃に、張副学長が到着した。再度、乾杯である。

張副学長は体が大きくがっしりしている。お酒にとっても強い。その副学長がまた皆に、何度も「乾杯」を要求する。物理の小川先生に「中国で乾杯は、杯を乾す（一気に飲む）を示す。乾杯しよう」と、乾杯合戦である。紹興酒の乾杯合戦はすごい。この紹興酒が私の知る安物の紹興酒と似ても似つかぬ良い味だ。だから困る。「乾杯」と言われると、つい、飲んでしまう。

さらに盛り上がったところで、本日の出し物。上海交通大学の経済学部 3 年生の女学生とレーザー研の村上准教授による「二胡」の演奏会である。村上君は趣味で二胡の演奏をしている。以前にも聞かせていただいていた感心したことがある。今回、彼から「かまわないよ



物理グループのテーブルで紹興酒乾杯。右端が張副学長

うでしたら、どこかで二胡の演奏をさせてください。二胡を通して日中友好に貢献したい」と申し出があった。大いに歓迎である。許さんとやりとりする内に「それでは歓迎会の時に、こちらにも演奏者を用意するので一緒に演奏しましょう」となった。



上海交通大学ではクラブ活動やボランティア活動が大変盛んである。08年4月にアジア太平洋物理学会の理事会を開催した際、記録係をボランティアの女子学生2人がしてくれた。会議の最後に、彼女たちが作成した議事録を聞かされて、その完成度の高さに大変驚いた。この時も経済学部の学生だった。

まず初めに村上君が日本の曲と中国の曲を演奏してくれた。かなり緊張している様子。少し、音がメカニカルに聞こえる。次に、学生との合奏になった。彼女はやはり「プロ並み」の力量だ（写真）。その後、彼女の独奏があった。村上君には申し訳ないが、格段の違いである。驚くのは、弦が2本しかないのに、途中でバイオリンより多数の音を同時に出しているように聞こえてくることだ。彼女のすばらしい演奏に、かなり酔ったおじさん先生達が、やんや、やんや、の喝采である。なお、彼女は5才から二胡を習っていると言っていた。

演奏が一段落したら、張副学長が「皆さん、二胡の演奏でカラオケしましょう」と言う。彼女に何々の曲（後で演奏を聞けば、中国のカラオケの定番、千昌夫の「北国の春」、谷村新司の「昴」ではないか）は弾けるかと聞く。彼女がうなずくと、張副学長が「皆で歌おう」と我々を誘う。私も前に行き6名ほどで歌うことになった。こんな時は、歌えるかどうかでなく、「乗り」の問題である。会場と一緒に彼女の演奏に従い、大声で歌った（写真）。



「中国人が日本の歌をカラオケ？」

と思う方もいるだろう。それがみんなうまい。04年の夏に山東半島で夏の学校を Jie と共同主催した際、学長になる前の Jie Zhang(張学長)も参加した。ある夜のパーティーで、カラオケ大会があった。Jie が「北国の春」を中国語の歌詞でプロ並みに歌うのには感心した。興味のある方は、その夏の学校の旅行記を読んでもください([9]の HP から旅行記入手可)。

中国語は「四声」といい、同じ音でも 4 種類の発音の仕方がある。例えば、清王朝の清は「チン」だが、音を下げながら発音する。しかし、始皇帝の「秦」も「チン」だが、音を上げながら発音する。この音の上げ下げや、山谷などで、同じ音でも対応する漢字が異なる。だから、日本語に比べ音の上げ下げの数はずっと多い。上品な中国語の会話を聞いていると、歌っているように聞こえる。中国に行く機会の多い方は、是非、カラオケを練習していくことをおすすめする（これは、私の長年の課題でもある）。

カラオケが終わった頃から、さらに、お酒のピッチも速くなった。許さんが「はい、まだ、コカコーラ（紹興酒：色がコーラと同じ）と、ミネラルウォーター（ビールのこと）が沢山残っています。先生いかがですか」と、コップに注いで回る。さらに、各所で「乾杯」の立ち飲み組も見られる。よく食べ、よく飲んだ。とても楽しい晩餐会であった。

印副学長に翌日、このような公式の訪問団は年間何件ぐらい有るのかと聞いたら「200-300 件くらいある」とのことであった。ほぼ毎日、歓迎会などしていることになる。単なる想像だが、張副学長は「宴会担当副学長」のようである。とにかくお酒に強い。そして、車の渋滞で遅くなったと言ったが、あれは嘘では無かろうか。毎日、宴会してれば当然、体が持たない。だから、お客さん達が適度に飲んだところで「ごめんなさい、遅れて」と言いながら会場に来る。そして、場をさらに盛り上げるのが、副学長としての彼の任務のような気がした。副学長任期の間、彼の肝臓が耐えられることを祈っておこう。

晩餐会を終え、旧本部のキャンパスに駐車していたバスに乗り、ホテルに帰ることになった。



この段階で、小川先生はかなりのご機嫌気分。揺れるバスの中、バスガイドよろしく、阪大の皆さんに「英語」で、ホテルに着くまで本日の総括をしてくださった。ホテルに戻り、物理の連中はその後、どういう訳か英語で話をしながら、近くのコンビニに寄った（私の場合は、英語で話す時は英語で考えるモードに頭が切り替わるので、外人と飲んだ後は良くこうなる）。その後、小川、高部と物理の若手5人は、ホテル最上階で水割りを飲みながらビリヤードに興じ、楽しい一日を終えた。（私は眠かったのに・・・）。

5. 17日午前（名古屋大学中国事務所訪問）

17日の朝、私は国際交流の方と一緒に名古屋大学の中国事務所を訪ねた。市内の旧本部キャンパスの東北の角地に、土地は上海交通大学が提供し、香港の不動産会社が所有する高層ビルがある。その26階に名古屋大学が中国事務所を構えている。現在、国際交流委員会内の中国ワーキングで、大阪大学も上海に中国事務所を設立する検討を行っている（私は08年年の夏頃に委員を拝命した）。

4月に来た際、名大事務所を訪問し（下の階には立命館大学事務所もある）、就任直後の副センター長の劉蕾さんと色々話をしていた（個人情報含め、教えていただいた）。名大のセンター長は中国の法律が専門の名大准教授の方で、彼は月に一度の割でここを訪ねる。だから、彼女が常勤して日々の業務を担当している。

4月に来たときは、事務所もただ広だけの空間で、劉さんは「一日ここにいるのは寂しいんですよ」と言っていた。彼女は長崎大学に留学し、大学院から名古屋大学で、学位を取り、東京で勤務していたところを、事務所の副センター長として白羽の矢が立った。給料なども厚かましく聞かせていただいたが、十分な額であった。当時は仕事もあまりなく、同窓会の名簿の作成あたりから始めていますと言っていた。

8ヶ月後の今回訪ねてみると、会議室や待合室などもしっかり内装が完成しており、事務所らしくなっていた。壁には08年のノーベル賞受賞の名大OB（小林、益川、下村）の大きな顔写真が掛けていた。受賞後は問い合わせがたくさんあったそうだ。彼女もだいぶ仕事に慣れて来たようで、雰囲気もだいぶ明るくなっていた。今は、北大（北京に事務所があり）と共同で行う大学説明会の準備に忙しくしているとのことであった。北大と協力することで、北京周り、上海周りの大学への説明が合理的に出来る。

この日は、国際部の脇課長補佐が色々質問してメモを取っていた。たぶん、1月20日の中国ワーキング委員会で報告があると思う。帰りに立命館事務所にも挨拶してきた。

6. 17日午後（物理グループの交流会に参加）

ホテルすぐの地下鉄1号線、上海体育館駅から終点で降り、5号線に乗り換えてミンハン・キャンパスに向かった。大学近くの東川路駅で降り、タクシーで理学部の建物群があるキャンパスの西北に着いた。漢字で「上海交通大学 物理」と書いて示したら、物理の建物「物理楼」の前まで連れて行ってくれた。今日は、物理、数学、環境・エネルギー、溶接、化学、医学などそれぞれのグループに分かれて、交通大学との交流を行っている。

物理からは小川、久野、岸本の3教授と保坂、森川の2准教授、佐藤、田中助教、3名の博士後期院生が参加している。詳しくは物理グループの報告書を読んでもいただきたい。着いたら、久野教授が模擬講義をしているところであった。素粒子物理学を大変わかりやすく、ビジュアルに講義していた。講義の中に、項目ごとに質問を入れ、聴講している交通大学の学生で手を挙げて答えた正解者に、昨夜、ホテル横のコンビニで買ったキャンデーをあげていた（なかなかやるな、と感心）。

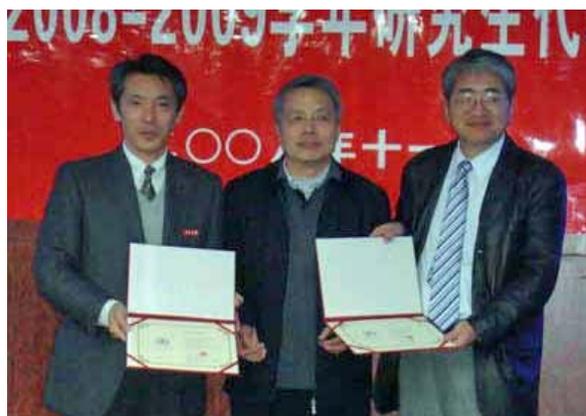
途中で、数学のグループの交流会の様子を見てきた。こちらの方は高級な会議室で、革張りの椅子にゆったり腰掛けて参加者が発表を聞いていた（写真）。数学も物理と同程度の人数の阪大参加者があった。今回の企画段階で、サイバーセンターの時田さんが「高部さん、大賛成。何でも手伝いますよ」と返事をくださり、そこで「じゃ時田さん。物理でなく時田さんは数学色が強いから、数学の知り合いに声を掛けて、数学のグループを作ってよ」とお願いした。基礎工の数学関係も含み10人も集めてくださった。

私は今回の全体責任者だが、全ての情報を掌握することは不可能である。やり方として、8つ学術分野のグループ責任者を決め、交



通大学に知人のいないグループには、印副学長にお願いして、受け入れ教官を紹介していただき、後は全て、プログラムや場所など各責任者に任せた。最終的なプログラムはいただいたが、物理、数学以外は場所を知らない。そこで、数学を見た後、また物理の会場に戻った。今度は岸本さんが核物理の講義をしていた。久野、岸本両氏とも米国生活が長いので英語は大変きれいにスムーズだ。

私が戻ったのを見計らい、小川教授と私に「上海交通大学 客員教授」称号授与式が執り行われた。客員教授の証書と「交通大学」と書いた胸バッジを物理の専攻長 Hang Zheng 教授から授与された（写真）。久野、岸本両教授にも後日、称号授与がされる予定であり、4教授は毎年、交通大学で集中講義を行う予定になっている。高部の場合は5月末から6月初めに、交通大学に滞在し、集中講義を行うことで、プラズマ物理学が専門の ZhengMing Sheng 教授と現在調整中である。



各グループの交流の様子は、グループの責任者から提出された報告書を読んできたい。

7. 印副学長との晩餐会（17日夜）

今日は印副学長主催の晩餐が各グループの責任者を招待して行われる。印副学長から事前に、今後の交流について話し合いたいので、17日の夕食に主だった方を招待したい、とメールがあった。場所がホテルの近くであることから、4時半には出発したいと許さんが言うので、昨日昼食を取ったレストランのところに集合した。用意された車で晩餐会のレストランへ。ホテルのすぐ近くの大きなレストランのVIPルームに案内された。参加者は阪大側が小川（物理）、林（数学）、近藤（環境・エネルギー）、片山（溶接）、高部であり、SJTUは印副学長と許さん。

席に着くなり許さんが「年末で予約がたくさん入っていて、場所を確保するのに苦労しました」と。確かに、大広間は満員の盛況ぶり。個室も一杯のようだ。このレストランは「海鮮料理」が有名で、入ったところの大広間には大きな生け簀（いけす）にエビや魚などが多数泳いでいる。本当に大きな、天井の高い、レストランである。ここは、上海体育場のすぐ前なので、体育場でスポーツ観戦した人たちが、

大挙して押しかけるので、こんなに広いのだろう。ちなみに、上海体育場は北京オリンピックのサッカー予選が開催されたところである。ホテルは、サッカースタジアムの一部で、上の階からは試合が部屋から観戦できる。

今日の進行役は許さん。昨夜同様、紹興酒で乾杯だ。印副学長はあまり飲まない。この席で今後のことについては話し合った。検討課題として以下が挙げられた。

- (1) 09年の両校学術セミナーは SJTU で開催の年なので、留学生フェアと合同で開催してはどうか。
- (2) 「留学フェア」を毎年開催する場合、11月初めが CSC Program や進路決定と関連して時期的には最適。
- (3) 米国がやっているように、阪大だけでなく 10 くらいの大学を阪大がとりまとめて連合で「留学フェア」をしてはどうか。その場合、場所は SJTU が提供するし、SJTU だけでなく復旦大学、浙江大学、南京大学、東南大学など近隣の有名大学の学生も参加できるように SJTU 側で手配する。そうすれば、両者にとって有益ではないか。(高部意見：CSC Program などでも学生獲得の競争相手は米国である。だから、日本の大学は競争よりまずは協力していき米国と競争するか工夫すべき。このやり方をまずはすべきで、その際、阪大と SJTU が中心に進めることは国内的にも大いに意義がある)。
- (4) 阪大も SJTU にミシガン大学のように Joint Institute を設立してはどうか。そして、この Joint Institute をただ阪大だけが使うのではなく、他の大学の先生の講義などの機会を与えることは両校に大いにメリットがある。そして、SJTU+OU の Double Degrees が取れるようにしていくと、学生のインセンティブが大きくなる。

以上、4 点が今後の大きな検討課題であることで認識が一致した。これについては阪大に持ち帰り、辻副学長（国際交流担当）と議論を重ねていく予定である。その過程で、国際部の木内部長はじめ同部の皆さんの理解や協力体制などについても話し合っ行ってきたいと考えている。

この日の料理は広東料理。広東地方は香港など南の地帯で、蛇料理なども有名である。次々と運ばれる料理に、骨付き肉があった。許さんが「これはこの店の自慢料理です。是非食べてください」という。どうも、蛇のようであるなー、と思

いながら食することにした。なかなかおいしい。酒の肴には絶品だ。肉は鶏肉の弾力性を強くした感じ。ウナギの骨付き（と言っても、骨は太さが 2mm はある）蒲焼きだと思えばいい。美味である。許さんが「精力つきます」と。

そこで、私が日本の方々に中国人の食に対する蘊蓄（うんちく）をたれた。中国人は、四つ足のものは椅子と机以外は何でも食べる。海で動くものは潜水艦以外、何でも食べる。空を飛ぶものは飛行機以外、何でも食べる。ところが最近、こんな話が交わされている。「飛行機もエビと同じで、ジュラルミンという堅い殻を伊勢エビのようにむいてやると、中に柔らかいおいしそうな身があるそうだと。これは、確か 8 月に岡山玉島高校の中国研修旅行[10,11]に同行した際、中国人ガイドに聞いた気がする。



宴たけなわに、この大きなレストランの総責任者が挨拶に来た。皆に紹興酒を注いで回り、挨拶をしていく。小川先生はにこにこ写真のようにこの若き美人の支配人と乾杯。某先生は彼女に「え、サービスは乾杯だけですか？」とセクハラまがいの挨拶。

この席で日本人の参加者がしきりと言ったこと。大阪にいとこのようにいろいろな分野の先生方と話したり、知り合ったりすることがない。この意味でも今回の留学フェアは大いに有意義であった。私もこのような機会がないと、横に座った片山先生や近藤先生とじっくり話す機会もないし、互いに知り合わないまま終わっていたでしょう。片山先生はレーザー溶接が専門だそうで「なんだ、私の専門と大いに関係有りではないですか。同じ吹田キャンパスにいて、今まで会う機会がなかったこと自体がおかしい」と互いにうなずき合った。

8. 最後に

短い準備期間しか無かったにもかかわらず、合計 37 名が大坂大学から参加してください、準備に携わったものとして参加者に大変感謝している。まず、互いに個人ベースで知り合いになること、face-to-face で学生とふれあうことが、両大学の交流には不可欠である。そして、今後、さらに個人個人の繋がりという「糸」が増えて、将来、太い、切っても切れない「綱」に成長していくことをねがう。関係者

の皆様、ありがとうございました。皆さん、次回にも期待してください。

参考文献、HP 集

- [1] SJTU Web-site:
<http://www.sjtu.edu.cn/english/index/index.htm>
- [2] SJTU 全学部紹介:
http://www.sjtu.edu.cn/english/admission/admission_department.htm
- [3] SJTU フェア実施予定のミンハンキャンパス :
http://www.sjtu.edu.cn/english/about/secnic%20spots_mh1.htm
- [4] S J T U の中国での大学ランク
<http://edu.sina.com.cn/focus/utop.html>
- [5] 中国の大学・分野別ランキング
<http://edu.sina.com.cn/gaokao/09utop/index.html>
- [6] 中国のハイレベル大学院生派遣プロジェクト
<http://crds.jst.go.jp/CRC/plan/m4-4-3.html>
- [7] 日中戦略的互惠関係
http://www.mofa.go.jp/Mofaj/area/china/visit/0805_ks.html
- [8] 福沢諭吉、昆野和七一校訂「福翁自伝」(角川文庫 15298,2008 年)
- [9] 04 年 8 月「実験室宇宙物理夏の学期」(山東省威海) 旅行記
<http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/kaigaiinshouki/90-05/04-3.pdf>
- [10] 岡山県立玉島高校の SSH(Super Science High school)
<http://www.tamasima.okayama-c.ed.jp/ssh/top/top.htm>
付録 10 も参照
- [11] 玉島高校 SSH (中国研修旅行) 08 年 8 月
<http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/kaigaiinshouki/06-/08.4.pdf>
- [12] 高部英明「アジア連合(AU)、まずは日中の科学者から」
<http://www.spc.jst.go.jp/exchange/report01.html>
- [13] AAPPS Web-site
<http://www.aapps.org/>
- [14] Report on Plasma School at SJTU (AAPPS Bulletin, English)
http://www.cospa.ntu.edu.tw/aappsbulletin/data/17-4/17_4_p3235.pdf

付録

081023(Thu)night

付録1：上海交通大学にて阪大留学生フェア実施（調査：回答期待）

10月8日、中国・上海交通大学(Shanghai Jiao Tong University: SJTU)との第13回学術セミナーを実施しました。

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/seminar/270.html>

その際、SJTUより、阪大側が望むならSJTUにて阪大への留学説明会・模擬講義など正式事業として受け入れる準備があると、辻副学長（国際交流担当）へ申し出がありました。高部は中国交流推進委員会（中国WG）委員（委員長は国際公共の山内教授）として、その可能性を調査開始しています。

SJTUは阪大の姉妹校にも相当します。理系を中心に優秀な学生・院生がいます。中国での大学ランクも

<http://edu.sina.com.cn/focus/utop.html>

の表にありますように急速にあがり、現在、4位です。

SJTU Web-site:

<http://www.sjtu.edu.cn/english/index/index.htm>

SJTU 全学部紹介:

http://www.sjtu.edu.cn/english/admission/admission_department.htm

SJTUフェア実施予定のミンハンキャンパス:

http://www.sjtu.edu.cn/english/about/secnic%20spots_mh1.htm

中国との大学との交流に対する、皆さんの意識は多様と存じます。高部が考えておりますのは以下の通りです。

-----（フェア開催の背景）-----

（1）SJTU大学院の修士課程の院生を主に、英語による模擬講義や部局の活動紹介を行う。

（2）修士の学生とface to faceで会話することで、江沢民時代に反日教育を受けた世代に、日本の阪大の先生の人間を感じてもらい、研究テーマのおもしろさを理解してもらい。

（3）昨年からはスタートした「国家留学生制度」でSJTU学長は毎年300人をSJTUから海外へ送り出すと言っている。留学フェアを通じて、SJTUの院生を博士課程後期学生として受け入れ、阪大で学位を取る可能性を探る。

（4）後期課程は定足数に満たない理系の専攻が多いと拝察します。まずは、それをSJTUの優秀で、ハングリーな院生で補い、同時に、研究室の国際化を推進する。それが、長い目で、他国の院生の受入体制にもつながる。

(5) アジアの学生が日本で学位を取り、その後、10年ほど日本で活躍する様な状況を意識的に作っていかないと、少子高齢化の日本の科学技術は地盤沈下する。阪大がそのお手本を示す。

----- (ご回答ください) -----

なお、山内委員長と話しましたところ、文系の場合は事情がかなり異なるようです。そのあたりも、皆さんのご意見をください。まずは皆さんのたとえば下記に関するご意見を

- (1) 趣旨に賛成か。反対ならその理由を。
- (2) 貴方を含む周りの人は、手弁当でも参加しようと思うか。そうなら何人くらい？
- (3) S J T Uにおける阪大留学フェア開催への忌憚ないご意見

を27日(月)までにください。29日の中国WG委員会で皆さんの意見も匿名で紹介します。

----- (実施形式と日程候補) -----

現地での説明会は、模擬講義形式とし、参加者の専門分野と人数を見て、2日間のパラレス・セッションでの専攻説明や模擬講義、学生との自由討論会をプログラムします。言語はすべて英語です。

時期については、現在、物理専攻が専攻単位で計画しています

12月16(火)、17(水)

の2日間を第1案と考えています。関連一分野3名の先生が参加として、90分講義を2回と考えています。分野ごとのパラレル模擬講義とします。また、S J T Uにお知り合いの居ない方には、張学長から分野の方とコンタクトできるように指示していただきます。

お返事お待ちしております。

高部

高部英明

大阪大学教授、アジア太平洋物理学会連合(AAPPS)理事

565-0871 吹田市山田丘 2-6

大阪大学 レーザーエネルギー学研究センター

電話：06-6879-8731 FAX:06-6877-4799

高部HP: <http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/>

AAPPS: <http://www.aapps.org/announcement/Divisions.html>

付録2：参加勧誘の最終案内

081120

阪大留学フェア参加者希望者の皆さん

先日来、お騒がせしています。上海交通大学(SJTU)・ミンハンキャンパス(3kmx2km)における表題の行事を阪大・国際交流の正式行事として執り行う予定です。SJTUもYin Jie教育担当副学長が責任者でこちらからのあらゆる要求に対応してくれる状態になっています。参加を希望される方は最後まで読んでください。(興味はあるが、読むのが面倒だ、という方は高部(06-6879-8731)に気軽に電話してください。喜んで説明します)。

上海交通大学とは阪大の姉妹校的關係にあります。現在、ここに阪大・中国事務所を開設する方向で議論が進んでいます。物理学専攻では久野教授がプログラムをSJTUの物理学専攻長H. Zheng教授と協議中です。参考にしてください。今回の第1回の試みは

【趣旨】

中国政府が昨年からはじめた国費留学制度で、国家重点大学のSJTUは毎年、学位を3年で取得を目指す大学院生を含め、海外の大学で受け入れ教官が決まっている院生300人を選別して送り出します。今の大学院生は反日教育を初等教育で受けており、阪大の先生とのface-to-faceの交流無くして希望することはありません。今回の機会に、教員同士の交流はもとより、修士学生との自由討論、彼らへの模擬講義など通し、まず、阪大で「英語」で研究ができ、学位が取れ、魅力的な先生が居ること、を知ってもらおう。10月7日に鷺田総長とSJTUのZhang学長の対談で、両校の過去13年の交流を、次の段階に発展させることで合意しました。皆さんがSJTUの教員・学生と親密な関係を築ききっかけとしたい。また、精華大学、北京大学、南京大学など他の大学との交流も学長のJie Zhangが「希望すれば俺が仲介してあげる」と言っています。SJTUを中国のハブとして、中国との人のきずなを太くしていく。

【フェアの開催方法】

修士の学生は両日、午前中は講義があるようです(現在、詳細問い合わせ中)、ですから、午前中は教員同士の交流。午後に学生を含めたプログラムを分野ごとに独自にSJTUの受入教官とメールなどで決めてください。受入教官が居ないグループ

にはYin副学長が同じ分野の専攻長など紹介してくださいます。また、阪大の正式行事ですので、初日の午後 1:30-3:30 の 2 時間は学部生も含め院生を集め、阪大の紹介など留学生センター他が行います。同時に、この日は、留学生希望者の相談窓口も設置します。後は皆さんやそのグループが相手の教員と自由にプログラムを組んでください。

【経費やSJTUに関する情報】

前にも皆さんに案内しましたように、出張は自己責任で行ってください（運営交付金なり趣旨にかなうなら競争的資金）。旅費や宿の手配などはいたしません。情報は提供します。

SJTU Web-site:

<http://www.sjtu.edu.cn/english/index/index.htm>

SJTU 全学部紹介:

http://www.sjtu.edu.cn/english/admission/admission_department.htm

SJTUフェア実施予定のミンハン・キャンパス :

http://www.sjtu.edu.cn/english/about/secnic%20spots_mh1.htm

S J T Uの中国での大学ランク

<http://edu.sina.com.cn/focus/utop.html>

【交通機関、ホテル】

交通大学ミンハン・キャンパスへは市内からだど、タクシーで1時間。料金は120元（2000円）程度。4人乗りなら1人、片道500円程度です。浦東（Pudong）空港からでも少し高い程度です。

地下鉄利用の場合、地下鉄1号線で、終点の華荘駅で降り、構内を歩き、5号線に乗り換えて、劍川路（Jincyuan Lu）駅で降りて、タクシーで10分程度（4月に歩きましたが30分以上かかった）。この場合も合計1時間程度。地下鉄は安い、安全、きれい。さらに、自由行動が出来る。宿に関しては、交通大学ミンハン・キャンパスの近辺にはあまり良い宿は有りません。

楽天の上海のホテル案内は

<http://travel.rakuten.co.jp/kaigai/china/shanghai.html>

高部は「楽天」で下記のホテルに14-18と予約しました。ここは歩いてSJTUの旧本部（古風な作り）にいけますし、店もたくさんあります、値段も手頃。地下鉄1号線の「上海体育館」駅のすぐ近く。「地球の歩き方・上海・蘇州・光州」p. 299の「上海富豪東亜酒店」です。

徐匯区 リーガル上海イーストアジアホテル(REGAL SHANGHAI EAST ASIA HOTEL) <http://travel.rakuten.co.jp/HOTEL/38224/38224.html>
本館デラックスルーム(バス・トイレ付) 802 元 x 1 室 = 802 元 (朝食なし・夕食なし)(約 11,404 円) 税金：別 サービス料：別

【希望者は高部に下記を記入し、早めに（できれば来週月曜までに）、返信してください】

----- (Return to takabe@ile.osaka-u.ac.jp) -----

お名前(Name) :

ご所属(Institution) :

役職名(Title) :

メールアドレス :

参加予定日 : 16, 17 日両方か、16 または 17 日のみか。

専門分野 (英文で、複数可) :

SJTUの対応者紹介を希望するか :

あなたの自由なご意見、要望など :

【追伸】

高部がなぜ、世話人をしているか、皆さんを誘っているかについては、以下の記事を読んでいただければわかります。

Web-site <http://www.spc.jst.go.jp/exchange/report01.html>

をクリックしてみてください。本HPはJST中国総合研究センターの画面です。

Takabe, Hideaki (Aki)

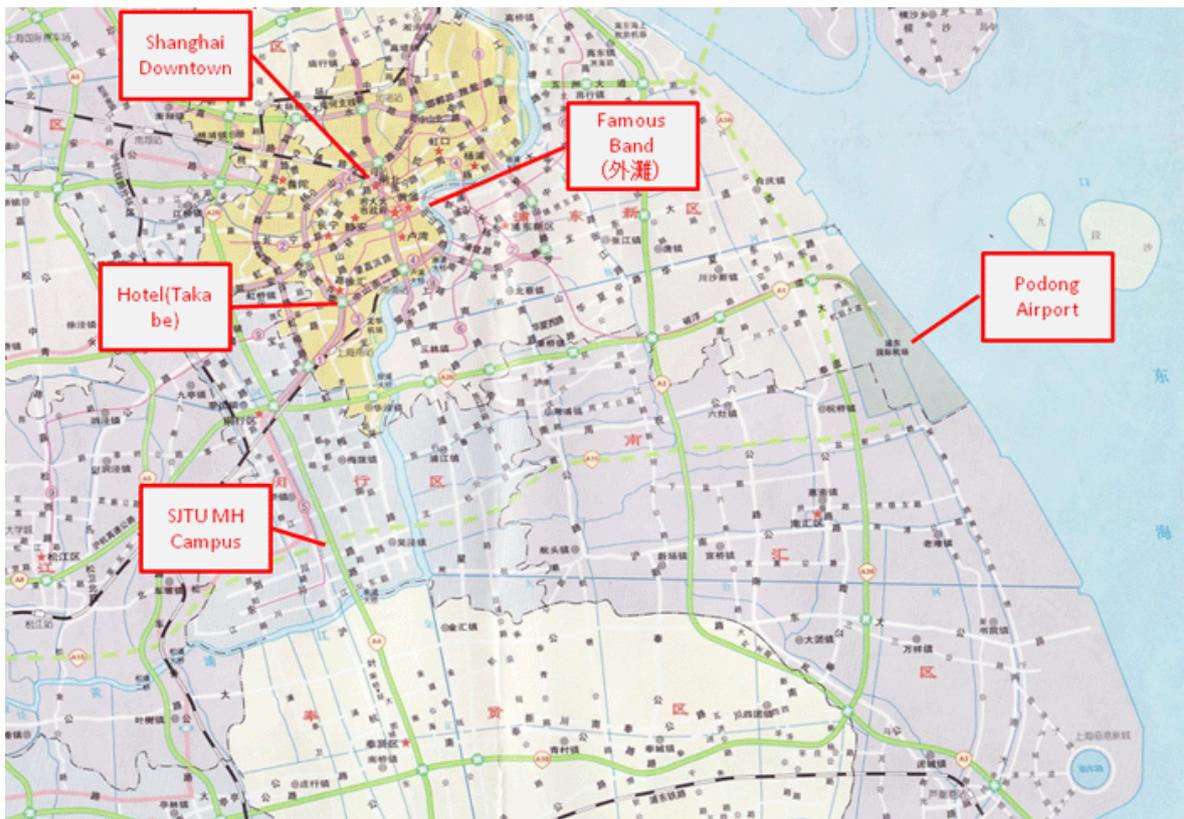
Professor, Osaka University

Councilor, Association of Asia Pacific Physical Societies (AAPPS)

Tel: +81-6-6879-8731 Fax: +81-6-6877-4799

Takabe-Web: <http://homepage2.nifty.com/AkiTakabe/>

AAPPS: <http://www.aapps.org/announcement/Divisions.html>



上海広域地図。MH Campus がミンハン・キャンパス



ミンハン・キャンパス建物地図。中央東(右)より行政楼。「凱旋門」は右下の「南大門」。白に黒で数字を書いているのが学生寮のアパート群。

Osaka University (Handai) Days in SJTU
December 16 and 17, 2008
Participant List

1. Physics Group (Yoshi Kuno and Hang Zheng)

T. Ogawa	Professor	Physics, GS Science	(GS: Graduate School)
Y. Kuno	Professor	Physics, GS Science	
T. Kishimoto	Professor	Physics, GS Science	
A. Sato	Assistant Prof	Physics, GS Science	
K. Tanaka	Assistant Prof	Physics, GS Science	
A. Hosaka	Associate Prof	Research Center for Nuclear Physics	
Y. Morikawa	Associate Prof	Institute for Science and Industrial Research	
G. Ito	D1	Physics, GS Science	
T. Ishii	D2	Physics, GS Science	
T. Morita	D1	Space & Earth Science, , GS Science	

2. Mathematics Group (Kei Tokita and Dongmei Xiao)

T. Nishitani	Professor	Mathematics, GS Science	
N. Hayashi	Professor	Mathematics, GS Science	
H. Sunagawa	Associate Prof	Mathematics, GS Science	
R. B.E. Wibowo	D3	Mathematics, GS Science	
H. Nishiyama	D2	Mathematics, GS Science	
Y. Tsutsui	D1	Mathematics, GS Science	
T. Suzuki	Professor	Systems Innovation, GS Engineering Science	
R. Takahashi	D2	Systems Innovation, GS Engineering Science	
Juan Lin	D1	Systems Innovation, GS Engineering Science	
K. Tokita	Associate Prof	Cybermedia Center	
M. Murakami	Associate Prof	Institute of Laser Engineering	

3. Environment & Energy Group (K. Sei and Zhenjia Zhang)

A. Kondo	Associate Prof	Environment and Energy Eng., GS Engineering
Y. Izumi	Associate Prof	Environment and Energy Eng., GS Engineering
K. Sei	Assistant Prof	Environment and Energy Eng., GS Engineering
N. Sarukura	Professor	Institute of Laser Engineering
K. Nagai	Assistant Prof	Institute of Laser Engineering
Haiyan Zhang	Special Researcher	Research Institute for Sustainable Science

4. Welding Science Group (S. Katayama & Jian Huang)

S. Katayama	Professor	Joint and Welding Research Institute
-------------	-----------	--------------------------------------

5. Materials Processing (Y. Setsuhara & Jian Huang)

Y. Setsuhara	Professor	Joint and Welding Research Institute
--------------	-----------	--------------------------------------

6. Medicine Group (F. Ishikura & C-H Wang)

F. Ishikura	Associate Prof	Allied Health Science, GS Medicine
-------------	----------------	------------------------------------

7. Medicine Group (Watarai & J. Yin)

Watarai	Professor	Chemistry, GS Science
---------	-----------	-----------------------

8. Coordination (H. Takabe & Jie Yin)

H. Takabe	Professor	Institute of Laser Engineering
-----------	-----------	--------------------------------

9. Administration Group (S. Waki & W-G Xu)

K. Nishiguchi	Professor	International Student Center
C. Kuroda	Associate Prof	Office International Relation, GS Engineering
S. Waki	Vice Manager	International Exchange Division
S. Kagawa	Staff	International Exchange Division
T. Suenaga	Professor	GS Law
Some ones	Alumni	Ex-Students of OU from China

付録5. 上海交通大学、京都大学、清華大学

上海交通大学は中国で2番目に歴史のある大学である。08年で創立112年を迎える。その設立は清朝時代。その歴史的背景は日本に深く関係している。

朝鮮半島の利益線を巡って、当時、朝鮮を属国として従えていた清朝に対し、朝鮮半島の実質支配をねらい日本は開戦の機会を待っていた。1884年（明治27年）8月、日清戦争が勃発した。維新で近代化を急速に進めていた日本軍は清国海軍などに圧倒的勝利をし、翌85年4月17日、下関において、日本帝国代表・伊藤博文と清朝代表の李鴻章との間で「下関条約」を締結し、日本の勝利に終わった。この時、清国側から2億両の賠償金を獲得した。この辺りの清国の内情は極めて複雑で、例えば浅田次郎の「蒼穹の昴」（講談社文庫）に詳しい。当時権勢を我が物にしていた西太后が海軍の戦艦建造費を流用し、北京郊外の頤和園造園に使ったことは有名である。

敗戦を受け、清国は30年前まで鎖国していた日本が近代化していることに驚き、当時の交通大臣であった盛宣懐に軍艦や列車など当時の最先端の技術を開発できる人材育成を命じた。そして敗戦の翌年、1896年に創設されたのが今日の上海交通大学の起源となった「南洋公学」である。一昨年、上海交通大学（Shanghai Jiao Tong University:以後SJTUと書く）は設立110年を祝った。2006年にSJTUでプラズマ物理夏の学校を開催した際、学長のJieが開催挨拶の時に、自らこの歴史的経緯を英語で喋っていた。屈辱をバネに皆がんばれ、と中国の学生に伝えたかったのか。

さて、ここにおもしろい話がある。日清戦争で2億両を受け取った日本政府はそのお金をなんに使ったか。これは阪大の元総長・金森先生から聞いた話。上のような話をしていたら金森先生が、実はその賠償金は多く軍事力拡大に使われたが、一部は京都帝国大学を創立するために使われたんですよ、と教えてくれた。確かに京都帝国大学は1897年6月の設立である。京大よりSJTUの方が、一年歴史が古い。

現在、中国の最高学府は清華大学。胡錦涛主席は高校で飛び級して清華大学の工学部土木工学科に入学している。胡錦涛政権が発足した2002年には、最高決定組織のトップ9名のうち4名が清華大学出身者で、胡錦涛政権を巷では「清王朝（チン・ダイナスティー）の再来」と冗談交じりで呼んだりしていた。この清華大学であるが、その設立経緯がまた面白い。

日清戦争での新興国日本にあっけなく敗北した清国が、真に「眠ったままの獅子」であることに気づいた欧州、米国は中国への利権・進出を本格化した。その反動は1899年義和団事件として、「ボクサー」と呼ばれる気功集団が日本を含む欧米を清国から追い出す運動にエスカレートした。義和団の攻撃を北京で耐え忍んだ米国軍隊の戦いは、チャールストン・ヘストン主演の「北京の55日」という映画で有名である。この際、西太后は義和団を支援した。しかし、陥落寸前の米国軍に日本を含む連合国の支援が到着し、事態は一変。義和団の変は1901年、清国が謝罪し、連合国に賠償金を払い停戦協定を結んで終結した。

被害の大きかった米国は義和団の変で戦死した兵士達への賠償金を親族に渡したりしたが、それでもお金が余った。当時の大統領・セオドル・ルーズベルト（日露戦争終戦の仲介をした大統領）はその使途を、イリノイ大学学長の提案に従う事を決断した。学長の進言は「中国の人たちの米国に対する理解が希薄なため、このような悲劇が起こった。中国の優秀な若者の米国理解を深めるため、北京に英語教育を基本にした大学を設置し、中国との友好を深めるべきである」という内容であった。この目的のために設立されたのが清華大学である。従って、現在の清華大学キャンパスはイリノイ大学に酷似しているようだ。設立は1911年である。

参考 (Wikipedia より)

上海交通大学

概要： 全日制在校生 23,900 人で、内本科生（学部学生）14,506 人、修士研究生 5,366 人、博士研究生 2,998 人、外国留学生1,959 人などである。留学生は韓国、ドイツ、日本が多い。2002 年にはシンガポールに最初の大学院を設置。また2003 年にはミシガン州立大学と単位互換協定を結んでいる。

沿革

- ✓ 1896 年に盛宣懐が上海に創設した南洋公学を起源とする。北洋大学堂とともに中国人によって設立された最古の大学である。敷地は上海の租界内にあり、戦火を受ける心配がなかった。
- ✓ 1910 年代後半に南洋大学、さらに上海工業専門学堂と改称された。当時は米国留学帰りの教授が多く、東洋のMITと称された。
- ✓ 1921 年北洋政府は各地の国立工業専門学堂を統合し、上海工業専門大学は交通大学上海分部となっている。
- ✓ 日中戦争中は重慶に移転し、戦後上海に復帰した。国共内戦後、一部の教授は台湾に移り、新竹に国立交通大学を設置している。
- ✓ 1956 年国務院の決定により、西北教育支援のために 60% の人員を西安に移し、

交通大学西安分部、上海分部と称した。

- ✓ 1959年7月31日、上海交通大学と西安交通大学が正式に成立した。SONYと提携し、能力の高い人材を輩出しており、世界的に評価が高い。

キャンパス

- ✓ 徐匯キャンパス（上海市徐匯区華山路） - 大学創業の地であり、本部などを置く。
- ✓ 閔行（ミンハン）キャンパス（上海市閔行区東川路800号） - 本科生用に新設された。
- ✓ 法華鎮路キャンパス（上海市長寧区法華鎮路）
- ✓ 上中路キャンパス（上海市上中路100号）
- ✓ 七宝キャンパス（上海市七宝路2678号）

清華大学（英名:Tsinghua University）は北京市西北郊の清華園に所在する総合大学。開学は1911年。25,000名の学生（うち本科生14,000名）が理学部、工学部、文学部、法学部、経済学部、経営管理学部、芸術学部などに学ぶ。中国で最も評価の高い大学であり、国家重点大学のひとつ。理系に強いとされ、文系に強い北京大学と比較対照される。朱鎔基元国務院総理、胡錦涛国家主席の出身校である。

付録6. 学長としての Jie Zhang

2007年秋、神戸で開催された国際会議に参加した彼を、阪大本部に連れて行く際、電車の中で聞いた。まず、彼がどうして学長に選ばれたのか。彼はその前は44才で「Youngest Academician」となり、その後、中国科学院(Chinese Academy of Science: CAS)に所属する108の研究所の総責任者を勤めていた。すべての研究所を毎年ヒアリングする立場にあり、彼を捕まえるのはだんだん難しくなっていた。彼とは2002年12月に運命的出会いをした。二人は同じ研究分野、ともに物理学会の理事、共に国際交流担当。最初に会ったときに共同研究を始めようと、意気投合した。彼のグループとは昨年12月まで学振の日中共同研究（高強度レーザーを用いた実験室宇宙物理）を3年間続けてきて、阪大と上海の大型レーザーで実験を行い、論文をAstrophysical J., Physics of Plasmasなど一流雑誌に掲載してきた（Jieとの関係はJST中国総合研究センターHPの高部記事[12]参照）。

上海光学精密機械研究所にある大型レーザー神光(Shengang)-IIを宇宙の衝撃波実験に使いたい旨、学長に頼んでいたところ、所長と交渉してくれ、所長の快諾を得て08年9月に実験を行うことになった。その第1回の打ち合わせを行うために

上海に来た。同時に、アジア太平洋物理学会 (AAPPS) [13] の会長に選出された学長の3年任期が08年1月からスタートし、その第1回の理事会が SJTU で開催された、日本物理学会推薦で選出された高部が理事として出席するために上海に来た。

彼が学長に選出されたのは以下のものである。まず、大学の教官が複数で彼らが望む学長候補を推薦する。このリストは共産党の人事部に送られる。共産党が候補者の経歴など調べ、その中から3名を選んで学長候補とする。この3名について大学教官による選挙を行い、新学長が誕生する。彼は第1回の選挙で70%の得票を得、絶大な支援のもとで学長に選出された。教官達からは10年は学長職を続けてほしい(1期は5年)と言われているが、まず、5年。何をやるか、はっきりした目標も掲げている。

学長になってからはメールを書いても必ずしも返事が来ないので、緊急時には私は彼の携帯電話に夜中に電話することになっている。これが確実に彼と話ができる方法だ。一度は話の途中で「ガラガラガラ」とすごい音がしたので、「おい、Jie、何があったんだ。大丈夫か?」と大声で叫んだら、1、2分して返事があり「驚いたか? 今、北京に行くため、空港のX線検査を通ったところなんだ。ハッハッハ」と、言うこともあった。

彼は全校4万人の学生と常に顔を合わせて、機会あるごとに学生達と話すようにしている。だから、学生からの信頼も厚い。ミシガン大学の学長が訪問した際、彼が「俺は学生にとっても慕われている。俺のように20%以上の学生から慕われる学長は、米国ではそんなにいない」と自慢していた。そこで、Jie は、新キャンパスの学生にミシガンの学長を紹介することにした。その時、Jie が壇上に上がると学生達から「ウォー」と右手を挙げての学長へのエールがこだまし、ミシガンの学長がびっくりしたようだ。

江沢民は今、上海に住んでいる。江沢民の息子・江綿恒は Jie の長年の友達でかつ、中国科学院の副総裁、同時に上海科学院の総裁である。また、IT 関係の会社も経営している。07年6月に息子の彼が JST に招待されて日本に来た際、大阪に寄りレーザー研の見学に来た。実は、彼から Jie に事前に電話があり「日本に行くが、どこを訪ねたらいいか?」と相談があり、Jie が「阪大レーザー研にゆけ」と示唆したとのこと。江沢民は時々、母校である SJTU をお忍びで散歩に来る。そして、懐かしい木など見つけては Jie に電話してきて「俺が学生の時、とても小さかった木が立派になっている」など話をするようだ。

付録 7. 中国大学事情

上海交通大学の教員の 11%が海外で学位を得た先生である。この数値は驚くほど低いのでびっくりした。例えば国立台湾大学の物理などは 90%は海外で学位を得た教員で占める。韓国も私の知る教授達は皆、米国で学位を得た人たちだ。たぶん、アジアでは中国（と日本）以外は 50%以上の教授は外国で学位を取得しているだろう。

日本と中国では当然、事情は異なる。中国での教授の給料は、基本給に相当する額が年額 100–200 万円である。ただし、競争的資金を獲得すると、その金額の 10–15%はボーナスとして、教員の給料になる。厳しい世界だ。そこで、海外で学位を取得した優秀な中国人は帰国したがる。質問時間に誰かが質問した。「海外に留学した中国の学生の内、何%の学生が中国に戻るのか？」と。印刷学長の答えは明快で「約 10%」と。

CSC Program では 3 年海外に留学し、学位取得した後は、2 年間は中国に戻り、国内での研究などの職に就くことが要求されている。まだ、始まったばかりで、帰国した優秀な学生達が 2 年後にどう判断するかわからないが、10%の数値が飛躍的に向上するとは思えない。2 年間の「義務」を終えた後、たぶん、留学先の教授などをお願いして PDF などのポストに就く留学経験者が多数出るだろう。それを覚悟の上での中国政府の判断である。「国家百年の計」を胡錦濤が英断したと考えて良い。

「何故、中国の留学生は中国に戻らないのか？」。これは経済的理由も大きい、根は深い。中国人にとって、かつての国家的愚行「文化大革命」の亡霊がまだ見え隠れする。今の学生の親たちはまさに、その犠牲になった世代だ。ハーバード大学の数学の教授(中国籍)とその辺りを話したことがある。加えて、6 月にパリから帰国するとき、横の席に座った Wisconsin 大学の教授（中国籍）ともかなりつつこんで議論した。

彼らは親や親戚は中国にいるので、年に 1 回は中国に帰る。しかし、米国で働いているのは、中国の政治体制がどの様になるか、様子をうかがっている。経済は発展していても、やはり一党独裁の国である。かつ、文化大革命のような、知識人の弾圧をいつ何時繰り返すかもわからない。だから、米国にいながら、いろいろな情報を集めながら（中国人同士で情報交換もしながら）、いつ頃帰国しようか様子をうかがっているのである。自由が保障された国で長く生活をしたエリートには、

自由が奪われるかもしれないというのは、生命の危機に等しい。その気持ちは私もわかる。

学長の Jie から、彼が学長に就任した後しばらくして、もらったメールのことを思い出す。「Aki, 日本の篤志家で SJTU に大口の寄付をしてくれそうな人を知らないか?」というメールが来た。何の話かわからないので、彼の携帯に電話した（今でも、彼と話すときは携帯に電話している。学長になり超多忙となったことで、メールはほとんど見なくなっている）。彼が言うには「SJTU の教育レベルを上げるために、海外の一流大学で教育・研究している中国人を大学で雇いたい。そのため高額給料を出したいので、お金がいる。そこで、お前にもあんなメールを書いた」と。私は「お前に協力はしてやりたいが、そんな金持ちが日本にいるなら、大阪大学に寄付してもらおうよ」と返事した。

付録 8. 中国大学の企業研究所としての役割（未完）



写真は上は SJTU の車両工学の研究施設のロビー。右は共同研究している（出資している？）企業のロゴ。日本の企業も多数ある。米国車が日本車に置き換わったように、世界中を中国製の車が埋め尽くす時代が近い将来来そうだ。



左は、情報系の研究科の廊下。

付録9. 国際交流打ち合わせ（12月15日夜）

今回の行事が大阪大学国際交流事業と承認されたことで、国際部の方や留学生センターの先生にも参加していただいた。脇、香川、西口、黒田の4氏である。15日の5時頃着のフライトで4氏が到着。宿泊先は市内で交通の便も良い SJTU の旧本館内にあるゲストハウス。7時過ぎにそのロビーで待ち合わせ、一緒に散歩と夕食に出かけた。私のように上海好きになっていただこうと、上海は初めてという3氏（黒田さんは3回目、4年ぶり）のためにも上海の今を見ていただこうと、歩いて10分の地下鉄1号線の「徐家匯」駅から地下鉄で人民広場駅に出る。料金は1人3元（1元=15円）。

上海の地下鉄は便利、安全、きれい。駅名も漢字だからわかりやすい。アナウンスは中国語と英語である。まず、上海の銀座通り「南京東路」のホコ天に出る。共産主義（宗教を否定する主義）のこの国で、沢山のクリスマス・ツリーが明るくランプで輝いている（写真）。通りの何か所もある。歩くとすぐに「時計、鞆、いりませんか。偽のブランド品。とても良い。安いよ」とくる。私は中国に何度も来ているのに「なぜ、日本人とわかるんだ」といらつく。「いらぬいらぬ」と言っても「これ本当の偽物。とても良いよ」と言い寄る。

次々と来る彼ら、彼女たちを無視して歩く。エネルギー不足でピンチの中国も、この南京東路は例外。ホコ天の距離も来るたびに長くなっていく。ネオンの中をホコ天を散策し、ホコ天が過ぎたところを、さらに15分程度歩くと東洋真珠タワーの明かりが目の前にだんだん大きくなってくる。突き当たりが「外灘（ワイタン）」。



私には「バンド」の方がピンと来る。歩いてきた道はT字型に、揚子江の支流、黄浦江という幅300m程度の川にぶつかる。その対岸が、超高層ビルが林立し、今なお建設ラッシュが進行している浦東（プードン）地区である。30年前、鄧小平が来て、改革・開放を宣言するまでは、ぺんぺん草しか生えていなかったところである。今は、アジア2番の高さを誇る国際金融ビル（森ビル所有）などが林立している。数年前まではパゴダの形をした88階建てのグランドハイヤット上海

(ホテル) が一番目に着いたのが、今は、周りに沢山の超高層ビルが建ち、目立たなくなってしまっている。

先ほど歩いてきた道に突き当たる形で、川沿いに5 m程度の高さで、幅の広い歩道が続く。この歩道のことを「バンド」という。川に沿って東に向いて、右手にはライトアップされた1920年代頃の英国建築（ネオゴシックが多い感じ）が立ち並び、当時の英国租界の雰囲気そのまま残している（付録11の写真）。対する川向こうの左手には21世紀の超高層ビル群。こちらはけばけばしいほどにライトが点滅、大きな広告塔になっている。川を挟んで約100年の時を超えた、その時代の最先端の高層ビルが建ち並ぶ景色が味わえるのは、世界広しといえど、上海だけでは無かるうか。

20世紀初頭のビル群がそのまま残ったのは、上海では日中戦争当時も上海事変はあったが、重慶のような日本軍による爆撃がなかったことが幸いした。上海の人が言っていたが、30階建て以上の建物を「超高層ビル」と定義した場合、上海の超高層ビルの数は、日本全体の超高層ビルの数より多いそうである。東浦地区に限らず、至る所に超高層ビルがある。夜景を見ながら記念写真を撮り（写真）、タクシーを捕まえて豫園（よえん）のライトアップの見学に行く。9月に上海に国際会議で来た息子が「豫園のライトアップがきれいだった」と言っていたので、遅いとは思ったが、行くことにした。私は豫園には何度も来たが、夜、訪ねたことは無かった。



さて、問題はタクシーに5人は乗れない。2台必要。豫園は広いので「豫園に行ってください」と漢字で書いても、同じところに着くとは限らない。そんなことを考えながら相談したら黒田さんは中国語が喋れると言うではないか。びっくり。後で聞いたが、言語学の勉強のため北京の大学に2年間いたことがあるのだそうだ。そこで、2台捕まえ、彼女に前の車について行くように後ろの車に指示していただき、豫園に着いた。

時間は8時を過ぎており、ほとんどの店がしまっていた。豫園全体はピンと跳ねた屋根瓦が特徴の古き中国の建物の集まったところ（写真）。戦前の租界時代は中国人の居住区だったそうだ。上海の日本人租界地で生まれ、11才まで育った母が小さい頃教えてくれたが、租界地の公園などには「犬と中国人は入るべからず」と書いていたそうだ。豫園の中央部分に池に囲まれた茶店（2階が中国茶の喫茶店）があるのでまだ開いていたら休憩しようと思ったが、残念。閉まっていた。豫園全体は軽くライトアップしており、屋根の形が浮き上がってそれなりにきれいだったが、息子が言うほどきらびやかでもなかった（帰国して息子に写真を見せてもらったら、ライトの数は数倍有り、色もあり、とてもきらびやか。たぶん、8時頃にはライトを減らすようだ）。



夕食を取りながら、明日の大学説明会の打ち合わせをしようと出かけてきたが、時間も遅いので、タクシーでホテルの近くに戻り遅い晩飯にすることにした。中国のタクシーは親切、安い、安全、で利用価値大いにあり。初乗りが11元（165円）で、上海市内ならどこまで行ってもそんなに高くない。黒田さんの中国語に助けをいただき、上海交通大学旧本部キャンパス、東門の近くまで帰った。降りてすぐ、黒田さんが「マトンのしゃぶしゃぶの店がありますね。良いですか」というので、そこにした。全国チェーンの店だそうだ。ここでようやく、本来の打ち合わせを、しゃぶしゃぶを食べながら果たすことが出来た（そうだ、この食事代、黒田さんが立て替えてくれていたんだ。返さなきゃ。でも、1人いくらだったっけ。聞いたけど忘れたな・・・。困った）。

付録 10. 上海交通大学附属中学校副校長との打ち合わせ（12月15日午後）

高部は岡山県立玉島高校のSSH(Super Science High school)の運営指導委員長を仰せつかっている[10,11]。2年前申請し、採択され、昨年4月から活動を始めた。SSHにはJSTから年間約2000万円の支援があり、各種理科教育増進のプログラムを高校で組んで実施する。

採択時点で、責任者の佐藤教頭より、中国の高校と生徒同士の国際交流をしたい。出来れば上海の高校を紹介していただけないか、と申し出があった。そこで、上海交通大学の学長に就任して半年になる親友の張学長にSJTUを訪問した際、相談した。すると、「SJTUには優秀な附属中学校（日本の中学・高校に対応）がある。そこと交流すればいい」となった。

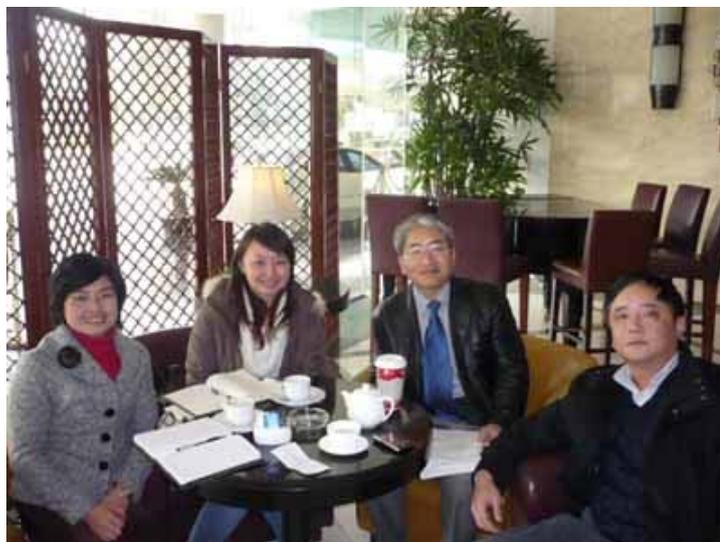
その後、大学の国際交流課の蔡（チャイ）さんからメール連絡があり、具体的交流が始まった。2008年度は6月6日に日中国際シンポジウムを企画、附属中学から5名の生徒を招待し交流を始めた。SSHの重点枠も申請し、採択され、その資金（500万くらい）で玉島高校理数科2年生を中心にした22名に校長、教頭も含めた中国研修旅行も行った。南京、蘇州、上海と中国の最先端科学から歴史的名所も巡る研修であった[11]。

さて、今回、14日（日）の夜、上海に到着し、タクシーでRegal East Asia Hotelに着いた。主に高速を使い1時間はかかる距離を150円で運んでくれる。中国のタクシーは安くて、親切で、安心。今回、皆さんに案内を出す際、このホテルに高部が泊まることをアナウンスした関係で、多くの阪大関係者が利用したようだ。このホテルは上海体育館というサッカー場の客席スペースを利用して一体で建てられている。12階のラウンジからはグラウンドが丸見えである。



今回泊まったホテル。上海体育館の客席と一体で建設されている。ホテルの入り口は右下にある。そこが、ロビー。

09年度の交流行事の相談のため、2時に蔡さんとホテルロビーで待ち合わせた。中学に出向くと思っていたら、副校長と国際交流主任がロビーに来ていてくれた。そこに、蔡さんが到着した。副校長は30代の女性で8月に歓迎式典など対応してくれた方。09年度の玉島高校の提案は、7月22日に日食が上海上空で観測されるので、それを共同観測し、報告会を英語で行いたいという内容。準備や観測、データの解析・整理、発表準備や報告会含め約一週間。附属中学は夏休みで、宿舎は使えるが食事の用意などが出来ない。周りにはあまりレストランもない。



そこで、副校長が SJTU 旧本部のゲストハウスを30人分予約する事になった。中学へはバスを用意する。このゲストハウスに今回、本部国際交流関係の4方に宿泊していただいた。私も4月に利用している。周りには沢山のレストランや百貨店などもあり楽しい宿泊になるだろう。附属中学には天文クラブがないので、SJTUの天文クラブの大学生に協力要請を副校長がするとのこと。1週間、観測だけではかわいそうだから、附属の方で社会見学(観光)のプログラムも用意しましょうと言ってくれた。

上海交通大学附属中学校副校長(左2番目)と打ち合わせ。
右はSJTUの国際部・蔡(チャイ)主任。

加えて、11月には、附属の生徒達を岡山に招待して、第2回の日中シンポジウムを開催したい旨、伝える。今回は職員含め15名程度を附属から派遣したいと副校長。観測に協力してくれた大学生も1人連れて行くと。玉島の案が4日間のプログラム。「ビザ取得に時間も手数もかかるので、滞在するなら1週間は滞在して、関西あたりも見学したい。費用は附属で出す」と副校長。神戸、大阪、京都の研修を含めたプログラムを組む必要が出てきた。歓迎である。08年の経験から、玉島高校に滞在する時間は必要最小にして、修学旅行的な研修を希望しているようである。2時間ほどの議論で宿題など確認し、別れた。私は国際交流主任と英語で今後の課題をメールで議論することになった。

付録 11 : 集合写真と上海写真集



上海交通大学闵行キャンパス、東南門「凱旋門」の前に集合した阪大からの参加者達。ただし、16日朝のバスを利用した方々のみ（参加者の一部）。



バンドから見た
1930年代のネオ
ゴシックの建物
群。ライトアップ
されている。07
年6月にSJTU
でプラズマ物理
の学校を共同主
催した際に撮影。



バンドから反対
側を見た際の浦
東地区の近代的
超高層ビル街。上
と同じ時に撮影。



07年6月に上海
交通大学のミン
ハンキャンパス
で開催した「プ
ラズマ物理の学
校」集合写真。
近隣の大学から
も参加者があっ
た[14]。



豫園の古風な喫茶店。
2階は喫茶店。花茶など珍しいお茶を出してくれる。茶菓子も絶品。



2000年夏の浦東高層ビル街。パゴダ状のホテルが目立つが、まだビルは少ない。

下は2007年6月、「プラズマの学校」開催のため出かけた時の写真。高層ビルがだいぶ増えている。パゴダ状のホテルの右に、現在、完成し、アジア2番に高い金融ビル（森ビル）が建設中。





東門を入ったところから、ミンハン。キャンパスを西に見た風景



物理の建物からキャンパスを見た風景。キャンパスの西の外れの写真。



ミンハンキャンパスの2万人の学生は全て寮生活。寮と言うより、左の写真のようにアパート団地。沢山のアパート・ビルが大学キャンパス内にある。

付録 12 : 高部の大阪大学紹介 PPT ファイルより

Welcome from OU Alumni, Father of ATOM



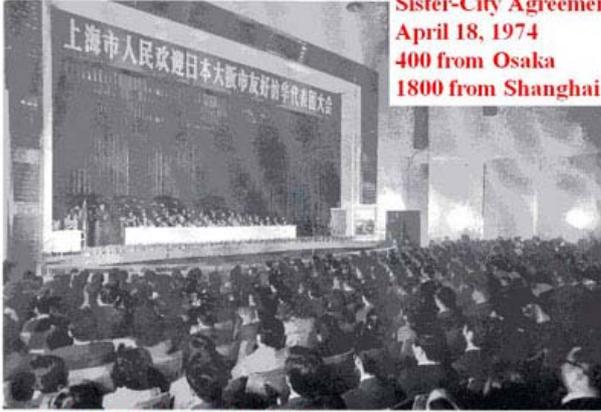


Iron Boy Atom



Osamu Tezuka
Frontier of Anime
Alumnus of OU

Sister-City Agreement
April 18, 1974
400 from Osaka
1800 from Shanghai



上海市人民欢迎日本大阪市友好协会代表团大会

大阪市・上海市 姉妹都市協定

友好都市協定式（上海市政府大講堂）

Osaka was completely destroyed in WW II (1945)



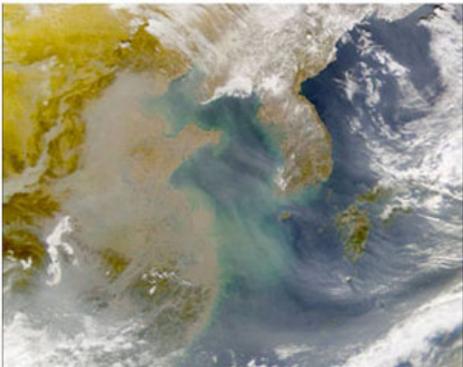

Near Osaka Station (1945)

B 29 Super Bombers

We have reconstructed Osaka after WW II
(Present View near Osaka Station)



Air pollution is coming from China to Japan by Jet stream.
We are in the same ship.
We have to collaborate to create our sustainable future.



Picture taken by Satellite

Osaka University Welcome You to Join Us

